

01

2012年3月11日

編集：荒浜再生を願う会
「希望の黄色い
ハンカチ大作戦」事務局
発行：NPO まちの縁側育くみ隊
(問合せ：事務局 052-201-9878)

通信

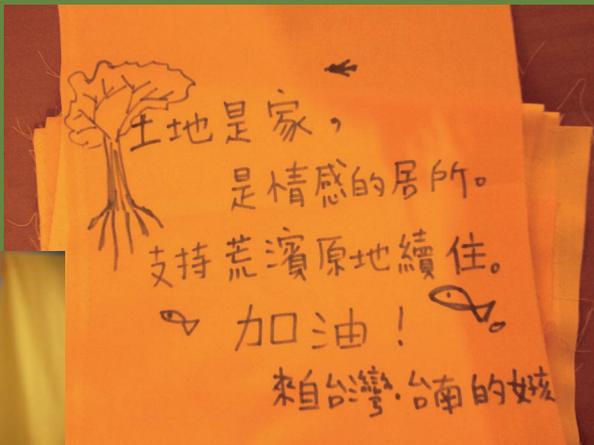
荒浜と世界各地のひとびと交流の軌跡

希望の黄色いハンカチ大作戦

荒浜 COMMUNITY PAPER

PICK UP

今週一枚



台湾大学 NINIさん

「土地は家なり。感情の居場所。荒浜の再生を支持します。頑張れ。」



目次

- 荒浜支援の呼びかけ (P2)
- 「希望の黄色い大作戦」のとりにくみ経過 (P3)
- 環太平洋コミュニティ・デザイン
・ネットワークの公開書簡 (P9)
- 今週のPICK UP (P11)
(全国各地からの応援メッセージ)

〈荒浜からのメッセージ〉

がれきの中から泥まみれで回収された

たった一本の黄色の旗。

仙台荒浜（深沼）で親しまれている浄土寺の

五色旗のうちの黄色だけがみつかったとき、

ふるさと再生への希望の象徴だと

住民たちはつぶやいた。

荒浜は、希望を黄色いハンカチに託します。

みなさん応援してください

荒浜再生を願う会

荒浜支援の呼びかけ

今年2月、全国に向けて次のような
発信をしました

★仙台荒浜支援の緊急アピール

東日本大震災からもうすぐ1年になるうとす
る今、復興計画のありかたが根本的に問われ
ています。私たちは縁あって仙台市荒浜地区
を昨年の4月から支援してきています。

荒浜地区は、昭和16年の仙台市との合併
までは七郷村と呼ばれていました。そこは1
500ヘクタールの水田と、赤貝日本一の漁
場と、昭和50年代後半の区画整理事業によ
る新興住宅地から成り、震災前は約700戸
のうち、農業者約180戸、漁業者約20戸、
他の大半は会社員の地区。犠牲者は約170
人。仙台で唯一の市民海水浴場としても昔か
ら親しまれてきました。明治29年、当時仙
台に在住していた島崎藤村は『若菜集』でた
びたび訪れた荒浜をモチーフに「潮音」をう
たいあげました。

荒浜は、このように自然生態系と文化・社
会生態系の色濃い「人間生命地域」としての
ふるさとの典型地区であるが故に、復興にあ

たり安全の確保と、ふるさと再創造を両立さ
せることへの住民の願いが強いところです。
しかし、仙台市は昨年12月荒浜を中心とす
る海岸線一帯を災害危険区域とし「移転の対
象となる地区」と決定しました。そこに至る
話し合いが全く不十分であり、かつ「防災集
団移転事業」のみが上意下達的に説明がなさ
れ、「現地再生」の道が閉ざされたことは大き
な問題です。住民の苛立ちは煮えたぎって
います。

海から離れた内陸部に移転することに対し
て住民は、「オカじゃ海のこと分かんねえ」「風
向きの変化を波音で聞き分ける」「魚や農作物
を分けあって暮らしたい」「昔から荒浜が保っ
てきた絆でまたつながりたい」等のつぶやき
の響き合いを通して、自分たちが目指したい
居住の場所にふるさと再生への想いを他者に
呼びかける行為を始めました。題して「希望
の黄色いハンカチ大作戦」です。「私たちはこ
こに安全に安心して住み続けたい」の表現と
しての「黄色いハンカチ」を通して世間にア
ピールし仙台市内はもとより、さらに全国
からの呼応の輪が広がることで世論を形成し、
荒浜住民のふるさと再生への志と行動を応援
することが肝要です。

そこで別添のような要領で、荒浜ふるさと
再生を応援する志縁を呼びかけるものです。
ご一覧の上、是非ご協力いただけますと再生
です。(ブログ安弘思遊記：荒浜への想い「青

い小屋が駆りたてるもの」
<http://inside.exblog.jp/17285813/>もご参考までに。)

尚、荒野となった荒浜地区にあった浄土寺
の仮本堂を、2月20日に建設する段取りと
なっています。その時にあわせて全国からよ
せられた支援のカタチ川沢山の黄色いハンカ
チがふるさと再生への希望のしるしとなって、
荒野にはためく状況をつくり出したいと考え
ています。

どうぞ主旨に賛同いただける方々は、早速
に何らかの支援行動をしていただけますこと
を切にお願い申し上げます。

2012年2月2日
延藤安弘(愛知産業大学大学院教授)の法人
まちの縁側育くみ隊代表理事)
宮西悠司(神戸まちづくりプランナー)

■希望の黄色いハンカチ支援呼びかけチラシ

仙台荒浜
希望の黄色いハンカチプロジェクト
希望の黄色いハンカチ大作戦は、仙台荒浜のふるさと再生を願う住民と、再生の気分を応答する志縁者の
とがなです。

茶漬からの手紙
がれきの中から泥まみれで回収された一本の黄色の旗。仙台荒浜(深沼)で
親しまれている浄土寺の五色旗のうちの黄色だけがみつかったとき、ふるさと
再生への希望の象徴だと住民たちはつぶやいた。荒浜は、希望を黄色いハンカチ
に託します。みなさん応援してください。

【荒浜のふるさと再生を願う】
地域の破壊が行ってしまった自宅に黄色いハンカチや旗
を立てて再生の気分を表現しましょう！

【ふるさと再生を応援する志縁者】
仙台荒浜のふるさと再生を応援してください。
みなさんからの応援で、現地住民の希望の気分がふくらみます。

●支援の方法について...
【1】希望の黄色いハンカチを届けてください。
① 応援メッセージを寄せる
・A4の紙に手書きメッセージを書いて、メール(下記事務局)で送っ
て下さい。(印刷PDF版) (あなたのメ
ッセージは黄色いハンカチが転写さ
れ、荒浜の地で掲げられます。印刷は
黒、赤の二色印刷となります)
※メッセージはブログなどで紹介する
ことはありますので、匿名でかかると
しますが、可能な限りお名前をご記入下
さい。地元住民の励みになります。

② 黄色いハンカチをつくる
・黄色い布の提供やミシン貸付など

③ 支援金を寄せる
・1体の希望の黄色いハンカチ(布)に必要な経費がかかります。
(1口2000円) (所属・お名前・ご住所・ご希望の旗を下記事
務所に連絡の上、ご入金ください。詳しい情報を折り返しご
連絡いたします。)
【振込先/三井住友銀行 仙台支店 普通預金口座(150) 普通、0420542。
名義：特定非営利活動法人まちの縁側育くみ隊】

●希望の黄色いハンカチ大作戦：事務局(愛知産業大学の縁側育くみ隊) 内：
1. 事務局(希望の黄色いハンカチプロジェクト) 〒981-8505 仙台市青葉区中央1-1-1 仙台市立中央図書館3階(仙台市立中央図書館) 仙台市立中央図書館3階(仙台市立中央図書館) 仙台市立中央図書館3階(仙台市立中央図書館)
●呼びかけ人：延藤安弘(NPO 法人まちの縁側育くみ隊代表理事)、宮西悠司(神戸まちづくりプランナー)

「希望の黄色いハンカチ 大作戦」のとりくみ経過

ブログで紹介している活動の様子を抜粋してお届けします。

【名古屋より】希望の黄色いハンカチづくり隊

希望の黄色いハンカチづくりは荒浜のみなさんを応援するとともに、わたしたちのふるさと再生の希望を描く機会でもある！・・・ということ、名古屋長者町地区でまち育て活動をしている面々を中心に、「希望の黄色いハンカチづくり隊」の活動がはじまりました。本日(2/1夜)来てくれたのは、その仲間や



名古屋長者町で住み働く人、そしてまちを遊びのフィールドにしている長者町ゼミのみなさん、などなど。仕事の帰りにまちの会所に11人が集合しました。具体的には、荒浜に思いをはせながら、ひたすら



黄色い布を切って縫ってアイロンがけ！震災前の荒浜の暮らしを伝える「イナサ」特集「イナサ風と向き合う集落の四季」を観ながら作業しました。みんな口々に「なんて豊かな暮らしなんだろー」・・・。

おそろ分けの暮らしぶりに感銘をうけて「生クリームたっぷりのケーキをおそろ分けして、米も魚もノリも野菜も頂こう！」と、もしも荒浜住民だったら・・・の話に花が咲きます！明日もがんばりましょう！



映像中に大で馳走を前に荒浜のご婦人が歌っていた「正月はいいもんだく」のフレーズを口ずさみながらの楽しい作業。おなかもすいてきました。仙台名物鉄板焼きしそ巻などに舌鼓を打って、作業開始です。

▼(下) 女性も男性も頑張る

▼(左) あれあれ、画面の向こうから荒浜の佐藤さんが作業を見守ってくれているみたい。



【名古屋より】 志援の輪

名古屋錦二丁目長者町地区編

希望の黄色いハンカチ大作戦を応援しよう！

大作戦に欠かせない黄色い布は、名古屋長者町地区であつという間に数百メートルを集めることができました。



町の問屋さんたちから黄色い布の寄付)

（長者

屋長者町のつながりを紹介します。長者町は戦後日本三大繊維問屋街として繁栄したまちです。今はさみしい状況も目立ちますが、まちを元気にしようというまちの人々の心意気の熱いところ。長者町まちづくりを支援する名古屋の縁側育くみ隊のメンバーは、縁あつて仙台荒浜へ赴くようになり、そこで経験をまた長者町の人々と分かちあい、「東北支援のあり方」や「東北での学びを自分たちのまちに生かそう」という『東北フックウ幻燈志援会』という場を開催するなどしてきました。

名古屋長者町地区の人々が荒浜志援に身を乗り出したのは、こういった経緯と、「問屋」



伊勢湾台風



ならではの旦那衆の心意気が受け継がれているからだ、と私は思っています。キーワードは、、、

「おにぎり」！！昭和

〇〇年の伊勢湾台風のとぎ、長者町は那古野台地に守られて大きな被害はありませんでした。しかし問屋の旦那衆たちは、郊外の被害にあわれた小売店を3か月も開店休業で船にのって助けに行き

ました。その時持っていたのが白いおにぎり。と、一升瓶につめた水でした。この心意気を今後も継承していきたい、そんな思いをこめて、『志援会』ではビールと「白いおにぎり」という不思議な食べ合わせをみんなで楽しんだのです。(2011.7月と10月)



『志援会』では様々な意見交換がなされ、「現地のニーズにあった支援を！」

「縁あつて地域間交流が生まれたのだから、継続的に！」「忘れないことが大事。」などの意見がありました。また、自分たちの学びの機会でもあるということ、「わたしたちのまちはどうするの？」という話におよびました。冒頭黄色い布を提供してくれた写真にもう一つある滝さんの発言は深いものがあります。「我々は商売人で物事を割に合う合わないで判断してきた。でも、割に合わないことをやる頭と志をもたない！ということに気づかせていただきました」

地域間交流の時代です！！

【台湾より】 志援の輪へ 仙台荒浜応援団

台湾チーム結成フォーラム 編



希望の黄色いハンカチ大作戦を応援しよう！2012年2月28日午後2:00、台湾大学にて行われた、「仙台荒浜応援団の台湾チーム結成フォーラム」の概要をお伝えします。

1999年の台湾中部「九二一地震」、2009年の「八八水災」被害の経験と教訓、原住民居住地溪洲部落の経過と再建設のとりくみ等を通して、荒浜再生の課題と次のような共通点を印象深く語ってくれました。

(1) 行政の効率性判断からの安易な再配置は耐えられないこと。

(2) 敢然と勇気をもって現地定住を目指し行動してきたこと。

(3) 創造的提案づくりをもって行政との合意を求めつつけること。

当日の熱い盛り上がりとそのような課題意識をアピールする場になりえたことは、荒浜再生支援の国際的世論喚起の動きとして今後につながる貴重なフォーラムでした。

以下は、フォーラムの流れを順をおってレポートしています。

はじめに、Pacific Rim Community Design Network (環太平洋コミュニティデザイン・ネットワーク) から、仙台市に向けての公開書簡の紹介がありました。この、アメリカ・カナダ・日本・韓国・香港等の専門家研究者たちのネットワークは、地域自らの復興の旗印としての「希望の黄色いハンカチ」に共感し、行動してくれているのです。まだ公開されていないものですが、内容は「地域のつばやきに注意深く耳を傾けてほしい」というお願い、「行政と地域住民が対話と協働をすすめていく創造的再建設に向けて見守りかつ支援したい」、「日本が世界に向けて再び不屈さと尊厳性をしめされることを



信じています。」という励ましを、世界中の数多くの既往の復興事例の経験から論理的に述べるものでした。(右写真: 張聖琳氏(国立台湾大学建築都市研究所教授))

その後、「希望の黄色いハンカチ大作戦」応援呼びかけ人である延藤安弘氏(愛知産業大学大学院教授)から荒浜への応援を求めるプレゼンテーション

次は、各パネリストからの発言です。ここでは代表的な発言をご紹介します。

「生活現場の意見を復興に生かすことが大切」



廖嘉展(新故郷文教基金會董事長)廖さんは、台湾921大震災(1999年)の復興まちづくりに携わり、阪神大震災(2009年)の時にNGOの活動拠点等として活躍したペーパードーム(仮設の紙の教会: 鷹取教会)の台湾埔里への移

築し(2008年)地域活動の場に育てること、などを通して日本とも交流を続けてきました。

「震災後自分たちで自分たちの村の再建設を



行った。」陳玉蘭(台中花東新村代表、台中縣霧峰鄉原住民生活教育協進會理事長)

「行政が効率的に事を運ぼうとして、かえってめんどうを起こしている。」黄智慧（小米穂基金會八八災後重建專案



執行長)黄先生は文化人類学がご専門で、台湾各地の被災地支援をされています。台湾でも日本と同じように移転にしても現地再建にしてもどちらか一色の上意下達の計画執行により住民の反発があり、



多くの住民活動の立ち上がり、何件もが訴訟問題にまでなっています

「私たちの溪洲では、原住民部落再建設プランを自分たちが中心となっつくついている。」萬福全(阿美族新店區

總頭目

「専門家の支援をうけながら部落再建設計画をつくっている」

張慶豊(新北市新店區溪洲阿美族文化永續發展協會理事長

「台湾にも痛ましい教訓がある。どうか日本は、被災者の生活権と土地への感情を尊重する弾力性のある政府であることを期待します。」夏



鑄九(国立台湾大学城郷所教授)夏先生は、フォーラムの司会も担ってくださいました。続いて、ひとりひとり、荒浜へのメッセージを黄色い布に書き込んでいきました。

当日はメディアも何社も取材に来ました。

台湾での関心の高さがうかがえます。台湾での応援の取り組みが、荒浜の人々の支えとなるよう、台湾チームはビデオに記録し、また黄色いハンカチにしたためたメッセージをたくさん日本の応援チームに託してくれました。三月、荒浜現地に届けられ現地ではためくこととなります。

Special thanks !

台湾でこれほどのお気持ちをみなさんお寄せ下さり、誠に感謝申し上げます。企画運営を担った台湾大学のみなさん、ありがとうございます！

(写真中央)本企画と行動の中心を担うフェリソンさん。Hui-Lin ! Thanks a lot ! 両脇に控えている



のが日本の応援チーム。(右)延藤(左)名畑そしてワシントンから熱意をもって国際的な呼びかけをしてくれた Shu-Mei ! Thanks a lot !!!

(*)台湾溪洲部落と荒浜の関係

司会も務めて下さった夏先生率いる台湾大学チームと、呼びかけ人の延藤氏は、溪洲部落(都市原住民)再建設プロジェクトの参加のデザインを担っています。台湾初の住民自ら計画し、つくる



社会住宅として、住民・行政・専門家の協働がすすんでいます。同時代の日本、荒浜の活動に共感をおぼえた部落の人々は、荒浜を「姉妹集落」とも呼んでいます。

【荒浜より】第一弾黄色いハンカチ設置完了!

春の訪れが待ち遠しい毎日です。2月17日、第一弾の黄色いハンカチ設置が完了しました。応援してくれる仲間がいる事に感謝しています。台湾での様子も、海を越えて応援の気持ちが届いてきてうれしい限りです。基礎だけになった家々に旗を設置していきます。

北西からの冷たい風が吹いています。早く「イナサ」の風が吹きますよう……。イナサとは、太平洋の南東からくる「情けの風」。大漁・豊作をもたらす風です。イナサが吹くと、魚ものってきて、いよいよ春の陽気が盛んになっていきます。ひきつづき、応援をよろしくお願いします。



■風の強いなか設置する貴田さん



■仁王立ちは山本さん

【荒浜より】第二弾黄色いハンカチ設置完了!

3月8日、名古屋から送られてきた第二陣の黄色いハンカチを9機設置しました。メッセージを寄せてくれたのは、日本をはじめ、台湾・ロンドン・フランス・韓国など世界各地から。特に台湾からは、八八台風で集落ごと流されてしまった部落の再建に尽力する、志おなじくするひとびとから励ましのメッセージがありました。(P12でメッセージの一部が見れます。)

■写真は第二陣黄色いハンカチを送る作業をしている名古屋の面々



環太平洋コミュニティ・デザイン・ネットワークの公開書簡

希望の黄色いハンカチ大作戦を通して、地元の方々の荒浜再生の想い知り、応援しよう、という専門家の集まりが、仙台市に次のようなオープンレターを出そうとしています。

(以下、日本語訳)

Open Letter to Sendai city government in Japan.

Dear Sendai city government,

We are professionals and scholars from the Pacific Rim community, including Taiwan, US, Japan, Korea, Hong Kong, Canada, etc. We believe community-based design and planning is the best and only way to better built environment for and of the people.

Recently, we have been deeply concerned about the ongoing post-earthquake reconstruction in Japan, especially the case of Arahama in Sendai, Miyagi prefecture. We've learned that a wide range of communities were forced to relocate collectively due to their homeland being designated as disaster-zone neighborhood, an area of 700ha. Though we can understand that the relocation is arranged with concern for safety and efficiency, we strongly oppose this kind of forced-relocation regardless of local community's will and complex needs. Plenty of previous reconstruction cases over the world have made it clear that what people need to survive and thrive as communities is much more than houses. Place matters in sustaining community network and human beings' attachment with locality and spaces. A convenient removal of neighborhoods from bay area to inland without the consent of the residents could become violence and cause serious aftermaths such as loss of jobs and industry, stress, suicides, disruptions of social relations, etc., if not paying attention to histories and geographies of community. Moreover, tremendous social capital can be lost and may be irreversible in the careless relocation process.

We've learned that communities in Arahama are acting out to express their opposition to the government-led relocation. They are calling for a more caring plan that integrate community economy and rehousing with respect to Arahama community's long-existing cultural practices and affections for ocean. We are deeply touched by their call and the "yellow handkerchief," an evocative symbol used by Arahama community to flag an urgent signal to the world. In writing this letter, we want to express our support to the community. Please listen carefully to the people who are desperately longing for conversation and a community-based reconstruction to replace current top-down relocation. We respect and support all of your continuous efforts in creative reconstruction. However, it is more important to do things right rather than do things fast. We believe that by working with community Japan can present to the world again its tenacity and dignity.

Sincerely,

Pacific Rim Community Design Network.

仙台市役所あて公開書簡
親愛なる仙台市役所 御中

突然のお手紙をさしあげます失礼をお許し下さい。私たちは、アメリカ・カナダ・日本・韓国・台湾・香港等の国にまたがる環太平洋コミュニティデザイン・ネットワークに結集する専門家かつ研究者です。私たちは、地域住民のための、地域住民にとってのよりよい環境形成の最良かつ唯一の方法としては、コミュニティに根ざしたデザインやプランニングであると確信しています。

私たちは、今日日本において進行中の震災復興について深い関心をいだいておりますが、とりわけ宮城県仙台市の荒浜のケースに注目しております。約700haの地区で、幅広い多くの地域住民が、災害危険区域の指定により、元々住んでいたところを集団的に移転せざるをえなくなった事態があると私たちは知りました。移転の方針は安全性と効率性からみてひとつの策として理解することはできませんが、一方で地域住民の中には移転を望まない事情や複雑なニーズがあることを考えますと、このような強制的移転の方針には強く反対します。

世界中の数多の既往の復興事例が明らかにしていることは、地域住民がコミュニティを再生しさらに発展させていくために必要とする

のは、住宅単体のもの以上の多面的な内容です。地域住民にとって営みの場所が重要なのは、人間関係ネットワークや人間存在として地域性や色々な空間への愛着的関わりを持続させることなのです。地域社会の歴史や地理的諸条件を考慮にせず、そして住民の同意なしに、浜側から内陸部への地域ぐるみ移転は、一見都合がよさそうでありながら、実は暴力的なことでもあります。そのことは仕事や産業を喪失したり、ストレスや自殺や住民間の社会的分裂等のような深刻な結果をまねきかねません。その上とてつもなく大切な社会関係資本が失われることになり、慎重さを欠いた移転プロセスは取り返しのつかない事態をまねくことになるでしょう。

荒浜の地域の人々が、こうした行政主導の移転に対して反対の意を表明し、行動を起こしておられることを私たちは知りました。彼らは荒浜コミュニティの長く続いた文化的慣習への敬愛や海への愛着をもって、地域経済と住宅再建設を統合しうるより配慮のゆきとどいたプランを希求しています。私たちは彼らの呼びかけと、世界中への緊急発信の旗印であり、荒浜コミュニティで使われていた住民相互に元気を呼びさますシンボルとしての「黄色いハンカチ」に深く共感を覚えるものであります。この書簡を通して、私たちは荒浜コミュニティ支持を強く表明するものです。

今おこなわれている上意下達の移転方針を超えて、絶望を希望に変えるために、対話をもって地域に密着した再建設を切望している地域の人々のつぶやきにどうぞ注意深く耳を傾けて下さい。

私たちは創造的再建設に向けてのみなさま方の持続的な努力を敬意をもって見守りかつ支援したいと考えています。とともに、事を進めていく上でより大切なことは、速さよりも正しさだということを強調したいと思います。私たちは行政が地域住民とともに対話と協働をすすめていかれ、日本が世界に向けて再び不屈さと尊厳性を示されることを信じています。

敬愛の心をこめて

環太平洋コミュニティデザイン

・ネットワーク

■環太平洋コミュニティデザイン・ネットワークについて

環太平洋沿岸の国々・地域では、住民参加のデザインが都市の計画やデザイン・プロセスにおいて増々重要性を高める要素となってきました。アメリカにおいて発展してきた住民に代わって計画提案を行うこと（アドボカシー・プランニング）や、市民参加の経験が、今日、日本・台湾・ホンコン等に定着してきてい

ます。とりわけ、それは日本におけるまちづくり、台湾における社區營造、ホンコンにおける都市計画や再開発プロセスのトップダウンにかわる創発的挑戦などにあらわれています。

環太平洋コミュニティデザイン・ネットワークは、2008年アメリカのバークレーのカリフォルニア大学における討論会から出発しました。「海をこえて響きあう—環太平洋地域における民主的デザイン」のタイトルの下に、その会議には日本・台湾・アメリカでコミュニティデザインの最先端の研究・実践にかかわるメンバーが参集しました。会議の目的は、環太平洋地域の参加のデザイン・プランニングの分野で活動している実践家と研究者の間で互いに経験を分かちあい、かつコミュニティデザインの実践と研究を発展させるためのものでした。

本ネットワークは、その後7回の国際会議や共同プロジェクトを通して、環太平洋地域の政治・社会的動向の素早い変化に対応しつつ、コミュニティデザイン|| 住民主体のまちづくりを比較・考察するフォーラムをすすめると同時に、常に協働と相互支援のための創造的媒体として機能しています。

Webpage :

<http://faculty.washington.edu/jhou/pacrim.htm>

■上記公開書簡に賛同する専門家署名

List of Signatures collected for the Support of Yellow Arahama (黄色手帕大作战) March 08, 2012

1. Jeff Hou/Chair/Department of Landscape Architecture, University of Washington/USA
2. Manish Chalana/ Department of Urban Design and Planning, University of Washington/USA
3. Dr. Yung Teen Annie Chiu/ Associate professor /National Taiwan University of Education, Department of Culture Creative Industry /Taiwan
4. Sheri Blake, D.Eng.(Arch), MCIP/Professor, Department of City Planning/Faculty of Architecture/University of Manitoba, Winnipeg, MB, Canada
5. Michael Siu/Professor and Designer of Public Design/Hong Kong
6. Liao, Kuei-Hsien /Ph.D. Candidate in the Built Environment, College of Built Environments, University of Washington/USA
7. Huang, Shu-Mei/ /Ph.D. Candidate in the Built Environment, College of Built Environments, University of Washington/USA
8. Sibyl Diver/ Ph.D. Student in the Environmental Science, Policy & Management/ UC Berkeley, USA
9. Lin Lin/ Assistant Professor/East China Normal University/Shanghai, China
10. Yuwen Chen/ Senior planner/AECOM/HK
11. Vera Zambonelli/ University of Hawaii/ USA
12. Hui-Lin Chao/ Ph.D. Student in the Graduate Institute of Building and Planning/ National Taiwan University/ Taiwan
13. Nini Kao/ Graduate Institute of Building and Planning/ National Taiwan University/Taiwan
14. Yun-Chung Chen, Research Assistant Professor, Hong Kong Baptist University/ Hong Kong
15. Artarie H. L. Liu/ Taiwan
16. Karuna Greenberg/Landscape Design/Berkeley, CA, USA
17. I-Hsuan Huang, NY, USA

18. Yu-Chung Li/ Landscape Design/SWA/Berkeley, CA, USA
19. Yan-xi Tung/ Community Design and Planning/ Taiwan
20. Wu, Ling-Tien/ Landscape Design/ AECOM, Beijing/ Taiwan
21. Dr. Kuang-Ting Huang, Built Environment, College of Built Environments, University of Washington, USA
22. Dr. Ching-Fen Young/ National Taiwan University Foundation of Building and Planning/ Taiwan
23. Dr. Ching-yeh Hsu/Associate Professor/Department of Visual Arts/Taipei Municipal University of Education/ Taiwan
24. Che-liang CHU, Kam-Ba-Dei, Nippon/ Associate Professor, Department of Fine Arts, Tainan University of Technology/ Taiwan
25. C.Y. Shih/Museum Studies at University of Leicester/UK
26. Dr. Jayde Roberts/Built Environments/ University of Washington/ USA
27. Hsiung Chen Hua/Pharmacology/Taiwan
28. Tommy Wu/Graduate Teaching Fellow at Queens College/NY, USA
29. Mei-Chuan Hsieh/Literature/High School Teacher/ Taiwan
31. Am -Pei Kung/ the Graduate Institute of Building and Planning/National Taiwan University/Taipei, Taiwan
32. Mavis Chen/ Taiwan
33. Lee, Chia-Chi/ Taiwan
34. Tung-Yang Lee/Public Construction Commission, Executive Yuen/Taiwan
35. Chen, Ying-Fen/M.S., the Graduate Institute of Building and Planning/ National Taiwan University/Taiwan
36. 徐苑斐/ Farmer and freelance web designer/ I-Lan/Taiwan
37. Chiungyun,Hu/ Taiwan
38. Ping-Heng Chen/ Freelance translator/Taiwan
39. Zheng YenWei/Freelance interpreter and translator/Taipei, Taiwan
40. Roman Schmidt/Architect, Henn Architekten/ Munich, Germany
41. Chih-Chieh Chuang/Architect/ Munich, Germany
42. Liz Maly/ Assistant Researcher at International Recovery Platform, Japan
43. Maggie Ho/Los Angeles, CA/ USA
44. Jim Diers/Associate Faculty for Social Work and Landscape Architecture at University of Washington, Seattle, WA/ USA
45. Mumu/New Taipei City, Taiwan “Let’s us encourage with each other!!”
46. Meng-chi Hsueh/ Architect / Ph.D. Candidate in the Graduate Institute of Building and Planning/National Taiwan University/Taipei, Taiwan
47. Zoey Wong/ Hong Kong
48. Kaikai cho/ Mapopo Community Farm/ Hong Kong
49. I Chun Kuo/Taipei, Taiwan “Please make their homes come alive at the original places where they belong to.”
50. Dr. Yasuhiro Endoh /愛知産業大学大学院教授,NPO 法人まちの縁側育くみ隊代表理事/Japan
51. Dr. Huang, Chih Huei/ Assistant Research Fellow in the Institute of Ethnology, Academia Sinica, R.O.C./Taipei, Taiwan “The loss from the relocation policy will be no less than the loss in the Earthquake. Please reconsider the policy!”
52. Sam/Coos Bay, OR/ USA. “Relocation is a sensitive process and should be dealt with great care. Those that are effected should have the leading voice as to what and where their new homes and lives are rebuilt!”
53. Graeme Bristol/ Centre for Architecture & Human Rights/CANADA
“I certainly support ...to ensure that post-disaster reconstruction is driven by the needs of the affected communities first. As I learned in the post-tsunami recovery in Thailand in 2005, far too many important aspects of history, culture and community are lost when recovery is directed from above and from far away. I hope your efforts are successful in changing the direction towards a more community-led recovery.”
54. Yin Meng Ko/Taiwan
55. 謝美娟/Literature/High School Teacher/Penghu, Taiwan
56. Dr.林宗弘/Assistant Research Fellow in the Institute of Humanities and Social Sciences , Academia Sinica, R.O.C./Taipei, Taiwan
57. Hsia, Chu-joe/Professor at the Graduate Institute of Building and Planning/ National Taiwan University/ Taiwan
58. Yu-Ting Lin/the Graduate Institute of Building and Planning/ National Taiwan University/Taipei, Taiwan
59. Chiungyun Hu/New Taipei, Taiwan
60. Am-Chong Ip/ Department of Cultural Studies, Lingnan University/Hong Kong
61. Sahera Bliebleh/PhD Candidtate in Urban Design and Planning, College of Built Environments, University of Washington, USA/Palestine
62. Riela Provi Drianda/Faculty of Horticulture, Chiba University, Matsudo City, Japan
63. Rose Wu/ Hong Kong
64. Yoshiharu Asanoumi,Chief Planner, Setagaya Community Design Center/ Japan
65. Jiawen Hu/PhD student in the Built Environment, College of Built Environments, University of Washington/USA
66. Tamesuke Nagahashi/Community Design Center, Kyoto/Japan
67. Yuko Hamasaki/ Chikushino, Japan
68. Cheung Choi Wan/Hong Kong
69. 高樹仁/ Planner based in Beijing, China/ Taiwan
70. Mirana M. Szeto/Assistant Professor in Comparative Literature at the University of Hong Kong/Hong Kong
71. 劉奕好/ Taipei/Taiwan
72. Sawako Ono/ Tokyo, Japan
73. Satoko Asano/Japan
74. Liling Huang/ Chair of the Graduate Institute of Building and Planning/ National Taiwan University/ Taiwan
75. Shenglin elijah Chang/ Associate Professor at the Graduate Institute of Building and Planning/ National Taiwan University/ Taiwan
76. Toyoda, Leiko/ President at Fudo planning /Planning manager , Renewable energy business department at Komai Kekko Inc./ Ine-cho, Japan

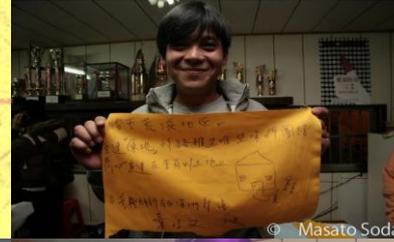


仙台市 荒浜地区の皆さんへ
被災地の復興を協力に行けないけど、
ここで皆さんのために応援します。
何があっても、あきらめずに
どうも頑張ってください
早く帰ってきてほしいのです!!
日本と台湾は、
最高の仲間をあてますよ!!
大正蔵 2011年2月10日 台北で 台湾復興
(建州100日) 東北 絆 絆 絆



←
わが友よ、立ち上がれ、己
の努力を信じろ。頑張ろう
(台湾・溪洲)

→
仙台市荒浜地区の現地再
建の道は険しいけど、み
んなが一致団結して、本
来の土地に再建できるよ
う、お願いします。
(台湾・溪洲)



→
荒浜地区の住民たち頑張ろ
う。家を守ろう。あなたが
たを支持します。
(台湾・溪洲)



→
あなたたちの、知恵ある
根性に、全力で支持いた
します。
(台中花東)



←荒浜地区の被災者たち
へ あなたがたは苦しみ、
挫折し、あなたがたの全て
は、私たちが身をもってか
んじている。我台湾溪洲部
落、あなたがたの強き勇敢
たる心は、あなたがたの家
のふるさとで、もう一度立
ち直らせるように、願いま
す。頑張ろう。(溪洲)



←
ひきつづき努力をおねがいし
ます。あきらめずに、ふるさ
と荒浜への想いを。頑張ろう。
(新故郷文教基金會董事長)

→
台湾から応援しております。
民の力を信じてください! 黃
智慧 (小米穗基金會八八災後
重建專案執行長)



あかるく!
東らしく人的に
は-ふるに!
寛まっく前を
頑張るの! 見せ!



Unite
みんながゴツゴツカを合わせれば
まよと再生される! あきらめず
Don't give up!